

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 武内 進一 印

学位申請者 Fafa SENE(ファファ・セネ)

論文名 Street Vending and its Representation in Urban Households: An Investigation on Dakar Markets in an Empirical Approach

本論文は、セネガルの首都ダカールで路上の物売り（street vending）を行う人びとを、おもに文化的な側面から考察したものである。サブサハラ・アフリカを含む新興諸国の路上の物売りは従来、経済的側面からインフォーマル・セクター、インフォーマル経済の枠組で批判的に考察され、政府からフォーマル経済への転換を求められて排除の対象とされてきた。これに対して本論文は、アマルティア・センのケイパビリティ概念から着想を得て、現地調査で 350 人の従事者らに丁寧な聞き取りを行い、そこにある経済的な動機とは異なる意味—すなわち路上の物売りは家計や世帯（household）で定められた役割を果たし、人間としての尊厳を保つ意味—の重要性を明らかにしたものである。

全体は二部構成で、それぞれ三つの章を含んでいる。

第一部第一章ではダカールで路上の物売りが行われる状況を概観し、かれらの活動に関わる問題の概念化に焦点を当てている。すなわちインフォーマル労働の従事者が全般的に直面する課題から、かれらが路上を占拠するよう仕向けられる理由までを検討し、彼らが路上に存在する理由についての誤解、その原因について確認した。また本論文で考察対象とする三つの市場（マーケット）、すなわちサンダガ、H L M、ティリーンの成り立ちや特徴、それぞれの市場の雰囲気（雰囲気）を明らかにし、路上の物売りの自助努力とかれらが直面する課題とを示した。

第二章では本研究の先行研究、特に従来、路上の物売りがその一例とされるインフォーマル・セクター、インフォーマル経済に関する先行研究を概観し、かれらがしばしばもっぱら批判的な観点からのみ考察され、税金逃れのための闇経済など否定的な評価を受けてきたことを確認した。一方、そうでない在り方を示して本論文にとって重要となった主要な先行研究が Al Jundi et al.2022, Chen, M. A.2005, 2008, 2012 であることを示した。またこれらを踏まえ、本論文のリサーチ・クエスチョンを明示した。

第三章では本研究の主眼であるダカールでのフィールド調査、聞き取りに関する方法論を詳述している。本論文著者の修士論文は、路上の物売りの移転促進をテーマとし、おもに定量的アプローチを用いて、家事と経済活動を組み合わせる女性のインフォーマル活動を必ずしもフォーマル化する必要はないと結論付けたものであった。ここから教訓を引き出し、本博士論文の定性的調査手法との対照を示している。定性的調査手法は、考察対象の三つの市場の特徴、路上の物売り自身の言説や思考をより深く検討するために不可欠であり、またこれによって、都市生活者が共有する価値観を示す都市文化を明らかにできると論じている。

第二部第四章では、アマルティア・センのケイパビリティ概念（人間の能力が十全に発揮できる条件について考察した概念）を手がかりに、上記の方法論に基づいて行ったフィールド調査の結果を提示した。ここで路上の物売りへの肯定的評価と否定的評価を整理し、セネガル社会におけるその社会経済的・文化的役割を、論文の根幹として提示している。路上の物売りたちは物質的なニーズと抽象的なニーズをよく認識して国民に必要な物資の供給に向けて努力し、貢献しているにもかかわらず、政府は彼らの公的な組織化や権限強化に失敗していることが指摘されている。本章ではまた、路上の物売り女性の存在と活動形態とその意味についても確認している。

第五章では、フィールド調査でほとんどの対象者が重視した世帯内での役割を担うという意味が、どのような文化的コンテクストの中で考えられているかを、理論的・概念的な枠組とともに考察した。経済的理由にとどまらない彼らの活動を支えるのは世帯・家族であることを確認し、男性と女性の路上の物売りに共通する部分、そうでない部分も考察している。特に、女性の物売りの場合、経済的自立を求めるといった動機がより強いことを明らかにしている。女性起業家は高いスキルや将来へのヴィジョンをもつが、彼女らへの支援は十分でないことも論じている。

第六章では以上の結果をふまえつつ、路上の物売りを分析することのサステイナビリティ研究としての意味を検討している。ここまでの諸章で、路上の物売りの関心と動機を彼ら自身の言説を提示しながら明らかにし、これらに対する行政の対応の不十分さを強調したが、これらは路上の物売りの心理的な不安に寄り添い、労働による人間の尊厳の保持の重要性を強調するものであった。かれらは日々の必死の努力によって社会の物質的および非物質的ニーズにこたえ、ダカールやセネガル全体の文化・社会・経済に貢献している。かれらを保護することは、その労働のサステイナビリティばかりでなく、社会や国家のサステイナ

ビリティに寄与すると述べている。

結論ではこれらの考察の全体像と各章のエッセンスを振り返る。そして、路上の物売りがかれらの意志と行動によって都市文化の一部となり、社会の価値観を体現していることをあらためて確認した。したがって、かれらを保護することはセネガルの社会的価値観を保護することになると結論づけた。

*

この博士論文に対する審査および最終試験は、2024年1月18日（木）16時から、本学本部管理棟中会議室で行われた。審査委員の一名がフランスに研究滞在中のためハイブリッド形式とし、すべて英語で審査を行った。

まず冒頭の30分でセネ氏が博士論文の内容について、プレゼンテーションを行い、次いで各審査委員からコメントと質問が行われた。予備審査（外大でいう事前審査）の時点で指摘された諸点について改善がなされたこと、先行研究を幅広く検討し、路上の物売りという新興国の経済、社会にとって重要なテーマに関する研究を行い、ジェンダー差にも着目して現地の声を届ける興味深い叙述を行ったことが評価された。

一方、複数の審査委員から指摘されたのは、文化、生活の質、世帯、人間の尊厳といった本論文の重要な概念がそれぞれ示されながらも、それらの論理的な関わりが十分に説明されていないという点であった。それは最重要である文化概念、またこれらの市場の特徴や独自性の位置づけ方に関わる。またそこで、センのケイビリティ概念の援用が適切であるかどうか、むしろエイジェンシー概念と照合してはというコメントもあった。また文化的側面を強調しすぎること、経済的側面を過度に対立的にとらえてしまうという難点が指摘された。もう一点は、リサーチ・クエスチョンとしている「路上の物売りはなぜ存在するのか？」という問いについてである。本文中の該当箇所の記述がわかりにくいこと、またこれに対応させた結論部分が弱く不十分であるという指摘があった。さらに、最後に付した recommendation は事例比較の部分を抜いて結論に含める方がよいこと、リサーチ・クエスチョンの設定や論文のタイトルについて、論文内容に即して修正する方がよいことも指摘された。

セネ氏はこれらの質問やコメントに対してすべて真摯、誠実に応答した。議論の中で、論文の最終提出版には審査委員からの指摘を可能な限り反映させることに加え、内容をより明確に反映すべく、論文タイトルを変更することが合意された。これらはいずれも論文の完成度を高めるための措置であり、本論文が十分な貢献を含む力作であることは審査委員全員が一致して認めたところである。以上の結果から、審査委員は全員一致で、セネ氏の博士論文審査及び最終試験を

合格と判断した。